

佳作

努力すれば感動に出会える

茨城県 東海村立白方小学校六年 岩間 大翔

ぼくには高校一年生の姉がいる。家ではだらしない人に命令して文句ばかり言ってくるのでロゲンカする事が多い。やさしいお姉さんとはほど遠い。そんな姉は中学から陸上部で短距離をしている。ちょうど一年前の夏、中学最後の県大会だったので観に行ったらぼくは、そこでしようげきを受けた。陸上で最も盛り上がる四×百メートルリレーの決勝だ。姉の目標は、家でも常に言っていた。リレーで優勝しメンバーで全国に行くというものだ。

アンカーを走る姉の目は恐いくらい勝負にもえていた。スタートのピストルと同時に緊張がはしる。一、二、三、走音、アンカーにバトンがきた時は二位だった。姉の力走もとどかず、二着だった。姉はそのままゴール先でひざまづいて、大粒のなみだをこぼした。

あのなみだは二着で泣いたわけじゃなく、目標であるみんなが全国へ行く夢がやぶれたからとすぐ分かった。この日のために学校でも家でも全力でトレーニングしてきたのはぼくも知っている。勝つか、負けるかじゃない。このレースを観た全ての人は感動したと思った。先生も父もなみだを流した。

ぼくは、野球を習っている。この日からぼくは毎日かかさず百五十本の素振りをすることにした。しかも一本一本を大切に。それまでは面倒だし、やりたくないと思いつながら振っていたことが多かったが、あの日の姉の姿を思い出すと何かを得られる気がして、毎日続けてみたくなった。

毎日バットをふるのとはうぜんのこと、少しでも時間があれば父とキャッチボールをした。そして、六年生になるころには打てるようになったし、エラーも少なくなってきた。

今年の六月、ノーブルホーム杯があった。その時、一打席目はショートゴロだけど内野安打で、二打席目は、ホームランを打てた。

この時、少し速い球だったが、タイミングを合わせて、体の軸がぶれずに打てた。あたったしゅんかん、ボールがしんに当たっていると感ずることがで

きた。ホームにかえってきたとき、ぼくは、すごくうれしかった。

毎日バットをふってきたから、打てたと思う。

努力は自分を裏ぎらない。

目標をもつのはかんたんだけど努力してつづけていくのは大変だと思った。またこれから一年素振りに加え走ることもがんばろうと思う。

そうすれば一年後、またホームランを打ったときのような感動に出会えるかもしれない。